
赤い眼

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い眼

【Nコード】

N6419H

【作者名】

るうね

【あらすじ】

飼育小屋のウサギが殺された。少女はその仇を討とうとするが：

…。【『夏のホラー2009』怖い話は好きですか？』 出展作】

飼育小屋の床に倒れているウサギを、足で小突く。びっくり、ともにしない。足にぬらりとした感触。血の感触。

だめだ、この程度じゃ満足できない。もっと大きな獲物、狩りがないのある獲物を……。そうだ、次は人間を……。

学校で飼っていたウサギが殺された。

殺してやる。私は誓った。必ず犯人を殺してやる。

学校でいじめを受け、家では虐待されている私にとって、飼育小屋でウサギと遊んでいる時が唯一の安らぎの時間だった。ウサギと遊んでいるうちは嫌なことを忘れられた。私にとって、ウサギは友達や家族、いや、それ以上の存在だった。

ある朝、餌をあげに飼育小屋に行ってみると、中も外も赤く染まっていた。あるいは刃物で首をかき切られ、あるいは手足をばらされ。生き残っていたのは一匹だけ。他は全て無残な肉のかたまりになり果てていた。

その日のうちに、私は行動を開始した。家から肉厚の中華包丁を持ち出し、夜中に飼育小屋のそばの茂みに身を隠して、犯人が来るのを待った。犯人は、必ずまた来る。私は確信していた。人間の残虐性について、私はよく知っている。対象を弱いとみると、ありとあらゆる手段で攻撃にかかる。クラスの連中も、両親もそうだった。ウサギ殺しの犯人も同じだ。ウサギみたいな小動物、弱い存在には、徹底して残酷になれる。そういう人間。ウサギの生き残りがいると知れば、嬉々として殺しにくるだろう。

そうはさせない。

私は暗闇の中、手に持った包丁を、ぎゅっと握りしめた。

ここ一週間、飼育小屋を見張っている奴がいる。犯人を殺そうとでもいうのか。夜中になると、近くの茂みに潜んで、朝までじっとしている。馬鹿な奴だ。

そうだ。次の獲物は、あいつにしよう。

あれから二週間が経った。まだ犯人は現れない。ほとぼりが冷めるのを待っているのだろうか。残酷だけでなく、小賢しい奴。

今日もまた、私は茂みに潜んで、犯人が現れるのを待っていた。空は雲で覆われ、星も月もない。他に明かりもなく、飼育小屋の中の様子がよく分からなかった。

私は頬のアザに手をやった。今日もまた殴られた。夜、こっそりと出かけていたことが父親にバレたのだ。別に私のことを心配して怒ったわけじゃない。要は、私を殴る口実があれば、何でもいいのだ。

憎い。やたらと暴力を振るう父親も、それに同調する母親も、アザだらけの私をばい菌扱いするクラスの奴らも。そして、私のたった一つの安らぎの場を破壊した犯人も。

殺す。必ず殺してやる。

と、その時。

キャン、という声が聞こえた。ウサギの声。だけど普通なら絶対に出不さないような声。

奴が来た。

私は勢いよく茂みから飛び出した。もう殺させない、絶対に。そのままの勢いで、飼育小屋に飛び込み――突如、足に激痛が走った。為すすべなく転倒する。ぐさぐさ。

全身に刺すような痛み。いや、実際に何かが刺さっている。

「う、ぎ、ああああああああああああっつつつつつ！」

転がる、するとまた新たな激痛に襲われる。鉄条網だ。激痛に霞む思考の端で、そう理解する。床一面に鉄条網が敷かれている。

「結局さあ」

誰かの声。

そちらに右目を向ける。左目は開けられない。鉄条網で潰された。「小動物を可愛がるってのは、そいつを見下してるのと同じことなんだよな」

声はする。だが、姿が見えない。いったい、どこに……？

「まあ、それでおおむね間違っ**て**はいないんだけどさ。たまには、その愚かな小動物の中にも俺みたいな変り種がいたりするわけよ」
「おかしい。声は、すぐ近くで聞こえるのに、誰もいない。そう誰も。」

——ウサギ以外は。

「人間以上の知能を持つ、いわゆる天才**つて**やつ？　こうして人間の言葉も話せるし」

と、ウサギが私の取り落とした包丁をつかんだ。

「武器も扱える。鉄条網の罠なんか、なかなかイカしてたろ？　……
……と、さすがにこの包丁は少し重いな。やっぱ使い慣れた凶器**もの**の方がいいや」

そう言**つて**、ウサギは餌箱の裏から、小さなナイフを取り出した。
「安心しろよ、すぐ楽にしてやるから」

ウサギはゆっくりこちらに近付いてくる。

「ああ、そうそう。最後に言**つて**おかなきゃな。お前、よくここに
来て、うじうじと泣き言並立ててたけどさあ。正直、ウンザリだ
ったぜ。勝手に俺たちを仲間として見てたみたいだけど、俺らには
そういう気、全くなかったから。有り体に言やあ、迷惑千万**つて**や
つ？　いつも思**つて**たよ、そんならさっさと死にゃあいいのに、
つてな」

私は心のどこか、抛りどころにしていたものが壊れていく音を聞いた。

ああ、赤い眼が揺れている。本当に楽しげに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419h/>

赤い眼

2010年10月21日22時45分発行